

日本質的心理学会研究交流委員会企画シンポジウム(会場:愛媛大学)

「フィールドワークのプロセスをいかに記述するか? :看護学のアプローチと心理学のアプローチ」

日時:5月27日(土) 13:30-17:00

場所:愛媛大学 総合情報メディアセンター(城北地区) 1階 メディアホール

話題提供:薬師神 裕子(愛媛大学)

「慢性疾患を持つ子どもと家族への支援プロセス」

濱田 裕子(九州大学)

「障害のある子どもと社会をつなぐ家族のプロセス

ー父親と母親の面接調査を通してー」

荻田 知則(愛媛大学)

「バリアフリー分野におけるニーズ把握のプロセス」

谷口 明子(武蔵野大学)

「院内学級の入院児への教育的援助」

指定討論:サトウタツヤ(立命館大学)

操 華子(国際医療福祉大学)

司 会:尾見 康博(山梨大学)

司 会(尾見)

「フィールドワークのプロセスをいかに記述するか——看護学のアプローチと心理学のアプローチ」ということで、質的研究のアプローチとして代表的なフィールドワークの方法についてのシンポジウムです。

今回は、看護学と心理学において精力的にご研究されている四名の先生をお招きして、フィールドワークの方法、とくにプロセスの記述に焦点を当てて議論します。フィールドワークを進めていくうちに、どのようにして、観たこと、聞いたこと、気づいたことを言葉にしてまとめていくか、悩んだりつまずいたりすること多いかと思います。フィールドワークをしていく中で、表現していく中での躓きを共有した上で生産的な答えを見つけられればというのが、この会の趣旨であります。

それでは薬師神先生からよろしくお願いいたします。

予備調査におけるフィールドワークの意義とフィールドノートの重要性 「心身症に伴う行動障害をもつ子どもとその家族の再生過程と家族の耐久力の特徴」 からの分析

薬師神裕子(愛媛大学大学院医学系研究科看護学専攻)

私は愛媛大学で小児看護を専門にし、現在、教育の現場に携わっております。四国に質的研究を根づかせたいというご意見を受けまして、今回、未熟ですが、私の修士論文のフィールドの過程をお話させていただきたいと思います。

フィールドワークでどのように、見たこと、聞いたこと、気づいたことを言葉にしてまとめていくかという、今日のシンポジウムのテーマをいただき、今回はフィールドで観察したデータをどう文章化していくかということではなく、「現象を生き生きと描くために必要な研究者の態度」は何かについて考えてみたいと思います。質的研究の論文を読んでいる際には、『データの収集には半構成面接と参加観察を行った』という一文が書かれていると思いますが、その一文に含まれている研究者の実際のフィールドでの行動がどういうことなのかを、私の修士論文での、インタビューと参加観察を中心としたフィールドワークの実際から考えていきたいと思っています。今日、お話ししたいのは、まず最初に「予備調査におけるフィールドワークの意義」と、2番目に「質的研究におけるフィールドノートの重要性」について、話題提供していきたいと思っています。

研究テーマと目的

まず最初に、論文の紹介をさせていただき、その後、実際のフィールドワークのプロセスについて後半、触れていきたいと思っています。私の研究では「心身症に伴う行動障害をもつ子どもとその家族の再生過程と家族の耐久力の特徴」をテーマにし、「小児心身症に伴う行動障害を持つ子どもと、その家族の適応回復過程を明らかにすること」と、「親子の相互作用から生まれる家族の耐久力(family hardiness)の特徴を明らかにすること」を目的として研究を進めていきました。

研究の動機

この研究を進めるにあたってのきっかけ、動機となったのは、私が看護師として小児科病棟に勤務していた時、多くの心の問題を抱えた子どもたちが入院してきました。その中で心身症とか拒食症という心の病を抱える子どもたちの小児科病棟でのチーム医療、看護で非常に困難性を感じており、自分自身が看護師として子どもたちに声をかける時、多大な影響を与えるのではないかとこの恐れを持っていました。そして心に問題を持った子どもと家族にどういふふうに接すればいいかということが、私の一番の課題でもありました。そのことがきっかけで、こういう研究テーマで研究に取り組むことになりました。

研究対象

この研究の対象としては、心身症に伴う行動障害として、不登校、食行動の異常、家庭内暴力、自殺企図を持った子どもとそこそご家族を対象にしました。最初の段階では、20家族を対象にしましたが、最終的には16家族を分析の対象としました。家族形態は核家族、三世代家族、母子家庭、父親の単身赴任のご家族も含まれていました。きょうだいで問題を抱えている家族も含め、20名の子どもとそご家族が対象でした。平均年齢は母親が42歳、父親が45歳、子どもが13歳で入院期間は1カ月～48カ月の間で、小児科でカウンセリング、入院治療を行っている患者さんのご家族でした。

研究方法

調査期間は予備調査と、実際の論文を書く際にあたってのデータ収集の期間と2つに分けて調査を行いました。データ収集としては外来カルテの記録、母親または両親への半構成面接、面接時の親子の相互作用の観察でデータ収集を行いました。実際のインタビューの内容は子どもの状態と家族の対応、家族の困難な体験と人間関係の変化、問題解決に向けた家族の対処方法という内容についてインタビューをさせていただきました。分析方法はグラウンデッド・セオリー・アプローチをガイドラインとして用いました。

研究結果

行動障害を持つ子どもの16家族に共通した特徴としては、Phase 1、Phase 2、Phase 3としてスライドに示していますが(図 1)、「衝突と放棄」「手さぐりのかかわりと巻き込まれ」「距離の確認と信頼の再構築」という相互作用を持つ3つの段階があり、「修羅場」「停滞」「渦からの脱出」というカテゴリーが抽出されました。個々の家族はこの3段階を体験し、停滞したり、もとに戻ったりと、そういうことを繰り返しながら親子がともに揺れて、最終的にはその子どもの心の問題を解決していくという共通のプロセスが明らかになりました。

フィールドワークの経過

この研究におけるフィールドワークの実際についてお話してきたいと思います。この研究をすすめるにあたっての、フィールドワークの経過を示します(図2)。まず、予備調査と本調査を行うといった2段階のプロセスを踏みました。予備調査は5ヶ月間で、本調査は3ヶ月間で行いました。

予備調査におけるフィールドワーク

このフィールドワークの経過から皆さんに今日お伝えしたいことの1点目として、「予備調査におけるフィールドワークの意義」を考えていきたいと思います。さきほどフィールドワークの経過をお示しましたが、改めて自分の研究プロセスを見直してみても、予備調査に5ヶ月間も費やしたのか？といった疑問と、この研究を行うにあたり、研究目的もまだはっきりしないうちから、指導教員からは「まあ、よろしい、早く現場に行きなさい」と後押しされフィールドに出ていました。私の指導教員

は、精神科医として臨床を行いながら教員として教育に携わっておられました。研究目的も定かでないのにいいのかなあ、と漠然とフィールドにでていったわけです。

5 ヶ月間の予備調査では、①小児科外来の診療場面での観察、②カウンセリング場面の親子・母親の観察、③研修生として子どもと家族へのカウンセリング、を隔週で行いました。学生であり、そして研究者という立場で、いろんな葛藤を抱えながらフィールドに立っていました。フィールドは、以前自分が働いていた職場でしたので、その強みとして、フィールドが元の職場であり、医師・カウンセラーは元同僚であり、受け入れ態勢は整っているので安心と思っていましたが、臨床経験はあるが、対象者の生活を本当に知らないこと、研究者という立場の居心地の悪さ、研究者という立場から現場を見る後ろめたさ、フィールドに存在する対象者の抱える問題の重さ、そして、その問題を受け止められるかといった心配や、自分が対象者にどのように関与すればいいのか、といった不安が襲ってきました。そして、フィールドにいる時には、いつも頭の中に、「フィールドに足を運ぶのはおっくうだ。データ収集は楽にできないか」といった思いを持っていたように思います。

フィールドワークの目的

しかし、予備調査におけるフィールドワークの目的について、振り返ってみると、①行動障害児の家族の現状と特徴を知る、②家族の治療過程の把握、③面接技術の向上、の3点があったと考えます。家族の現状と特徴を知る過程では、診察室での親子の観察として、親子のどちらが先に診察室に入るか、親子のどちらが先に医師と会話するか、親(子ども)の口調、表情、視線なども、親子の関係や相互作用を考えるヒントとなる重要なデータとなるものでした。

では、そのフィールドワークで、何をどのように観察し、記述していけばいいのか、正直、研究目的がきちんと焦点化されていない段階でフィールドに出たものですから、何を観ていけばいいのか、これに一番困ったことを覚えています。フィールドには莫大な情報があり、自分が目指すところの視点がはっきりしていない段階では、どこが重要なかわからなかったり、すべてが重要なことのように思えてきます。しかし、予備調査の段階では、開き直って、「観たいこと(研究テーマ)は、漠然としているが、現場でありのままを観てみよう！書いてみよう！」という気持ちでフィールドノートを書き始めることにしました。

フィールドノートの実際

次に実際のフィールドノートの内容を示します(表1)。これは、11歳の拒食症の子どもの退院前の両親と3人での親子面接の場面です。カウンセリングの参加観察場面で、見たままをまとめていますが、研究者自身がその場面を見て対象者について感じたことも含まれているのがわかるかと思えます。これは、7歳の女の子で行動異常が問題となってカウンセリングに訪れた家族を観察した場面です(表2)。お母さんが子ども二人を連れてカウンセリングに来た場面です。問題行動のある子どもの様子、きょうだいの関係、母親と子どもの関係を記述していることがわかります。

フィールドワークの意義

私の研究における、予備調査でのフィールドワークの意義について考えて見たいと思います。指導教員がとにかく現場に出なさいといわれたのは、私が看護師としてこころの問題を抱えた子どもたちに接することはあっても、自分にカウンセリングの経験がないため現場を知ることが大切だからだろうと、いうくらいにしか、フィールドに出る意味を考えていませんでした。

しかし、今、振り返ってみると、①対象者の治療の場や日常生活を知ること、②研究目的が明確に見えることが、③本調査での対象者の絞り込みにつながりました。また、④本調査でのインタビューの意味内容を深く知れること、⑤インタビューの文脈をつかみやすいといったメリットや、⑥実践現場における人間関係の構築、という点からも、予備調査におけるフィールドワークは意義があるものと考えています。つまり、フィールドワークは、研究におけるリッチなデータを生み出す準備であるとともに、研究目的を明確化し、現象の中から重要となるデータをつかむ感性を高めるトレーニングを行うことで、研究者の感性が高まり、結果的に「観る能力」「表現する能力」の向上につながったと感じています。また、インタビューや観察することは、看護師の行動に含まれていることであり、さらに「観ること、聴くこと」のトレーニングになったと感じています。

フィールドノートの内容の変化

次に、研究におけるフィールドノートの実際を提示しながらフィールドノートの重要性について考えて生きたいと思います。研究の本調査においては、3ヶ月間を費やし、データ収集には、①母親（両親）への半構成面接、②治療場面での親子面接の観察、③外来カルテからの情報収集、を実施しました。

これから示す4枚のスライドは、自分が行ったインタビューを振り返って「フィールドノート」として記述したものです。日付順に提示していきますので、その内容の変化をみていただきたいと思います。

これは、本調査開始後に、最初に行ったインタビューでの振り返りを記述しています（表3）。「もっと細かな状況や場面を聞いていくほうが、もっとうまく条件や環境といった背景が出てくるのではないだろうか。子どもと一緒にインタビューは、子どもとの相互作用は見られるが、母親が話しに集中できないといった欠点もあり、この問題をいかにクリアするかがインタビューの内容を濃いものにするであろう」、といった、自分のインタビュー技術の未熟さについて触れています。

6月6日 これは2番目のインタビューを行ったときの振り返りです（表4）。「あまり質問をすることをしなくても、話の中に自分が興味のあることの答えを見つけ出すことの重要性を感じた。質問項目の答えを、パズルを合わせるようにつなぎ合わせていくことが大切であると実感した日でもあった。質問内容はだまかに3つ4つで十分であり、話している内容から即座に自分の興味へと持っていく技術は、いかに相手の話をじっくり理解し、いかに自分の興味と照らし合わせるかである。」と、実際のインタビューの中で体験した、半構成面接の技術を実感している部分です。

次のインタビューは（表5）、「途中2回ほど、過去のつらさを思い出し泣かれる場面があったが、本人が話したい気分になるまで何も言わずに待つこととした。すると、自力で話の流れをもとに戻し

て下さった。」と、インタビューの中で、「相手に合わせて待つ大切さ」を実感し、「Sさんは『私もたんとここまで話せるようになったんですね』というコメントを聞いたときには、インタビューをすることで、その人の経験の振り返りができ、本人自身の成長を確認できるといった利点がインタビューにはあるのではないだろうか。」と、対象者の成長を感じ取っていることがわかります。

最後のスライドは、本調査でデータ収集を開始してから2ヶ月たった時点でのフィールドノートです(表6)。「自分が研究者として関与することで、家族の人のこれまでの努力を振り返り、家族が変化を感じる事ができるきっかけ[場]になりうることを実感できた。インタビュー中にインタビューイの話の要約することや、変化がわかる質問をなげかけてあげることで、家族は自分達の変化に気づく、それが『治療的な会話でありケア』であることが感じられた。」と、インタビューの技術的なことよりも、研究を行うことが対象者に対するケアの一環になることや、「Oさんは母親の変化、子どもの変化、家族の変化に明らかに納得し気づいていく事ができる。反対に、Nさんは大きな変化があったにも関わらず、その変化をまだ素直に受け止めれない事が大きな違いである。子どもの変化に気づく感受性、家族の変化に気づく感受性が随分と関係しているのであろうか？」と、複数のインタビューデータを比較し分析の視点を持っていることがわかります。

研究者の変化

これまで観てきた4つのインタビューのフィールドノートの記述内容から、研究者の変化について見てみたいと思います(表7)。最初に行ったインタビューでは、「自分が欲しいデータを得るためのインタビューの技術向上に対する考え」であり、次には、「対象者に波長を合わせる態度」といったインタビュー技術に関する内容を記述しています。そして、3回目のインタビューでは、インタビューが、「対象者の成長を発見できる力」に気づき、ようやく、「対象者を観る、感じる力」が獲得できています。そして、2ヵ月後には、行ったインタビューから、「対象者の行動の影響要因を考えそれを記述し、比較、分析する力を得ていたことがわかります。

つまり、自分自身の行動にばかりとらわれていた研究者が、ようやく対象者の外見や行動レベルでデータを捉えているのではなく、対象者の言動の奥深い意味を考えながら記述できるようになったのではないかと思います。このように、フィールドワークにおいてフィールドノートを活用していくことで、研究のプロセスに必要な思いがけない新しい発見や分析に必要な思考を与えてくれることがわかりました。

質的研究におけるフィールドノートの重要性

私の研究プロセスにおけるフィールドノートの記述は、①インタビュー技術の向上(方法、内容、関係性)。②インタビューが治療やケアになる意味の発見(一話すことが対象者の体験の振り返りとなる、一対象者自身が自己の成長を確認できる)、③データ分析や解釈に必要な情報の獲得(親と子どもとの相互作用の理解)といった効果があり、そして、最終的には、「観たものを記述し、解釈・分析する力」を獲得することができるのではないかと思います。

最後になりましたが、私の修士課程での研究プロセスを振り返って、フィールドでの体験、フィールドノートの記録の積み重ねが、「現象を観る、聴く、感じるために必要な感性を高め、質的研究で道具(ツール)となる研究者自身を成長させ、さらには、後のデータの記述や分析能力を豊かにする」のではないかと考えます。今から研究プロセスに入っていく方、そして、すでにデータ収集を行っている方に是非、フィールドノートの記述を面倒でも行って欲しいというメッセージを残して、私の話を終わりにしたいと思います。

文献

鯨岡峻(2005).エピソード記述入門:実践と質的研究のために、東京大学出版会、東京。

戈木クレイグヒル滋子(2005). 質的研究方法ゼミナール:グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ、医学書院、東京。

箕浦康子(1999). フィールドワークの技法と実際:マイクロ・エスノグラフィー入門、ミネルヴァ書房 東京。

無藤隆、やまだようこ、南博文、麻生武、サトウタツヤ(2004).質的心理学、新曜社、東京。

薬師神裕子(2002). 心身症に伴う行動障害を持つ子どもとその家族の再生過程と家族の耐久力の特徴、日本看護科学会誌、22(3), 10-19.

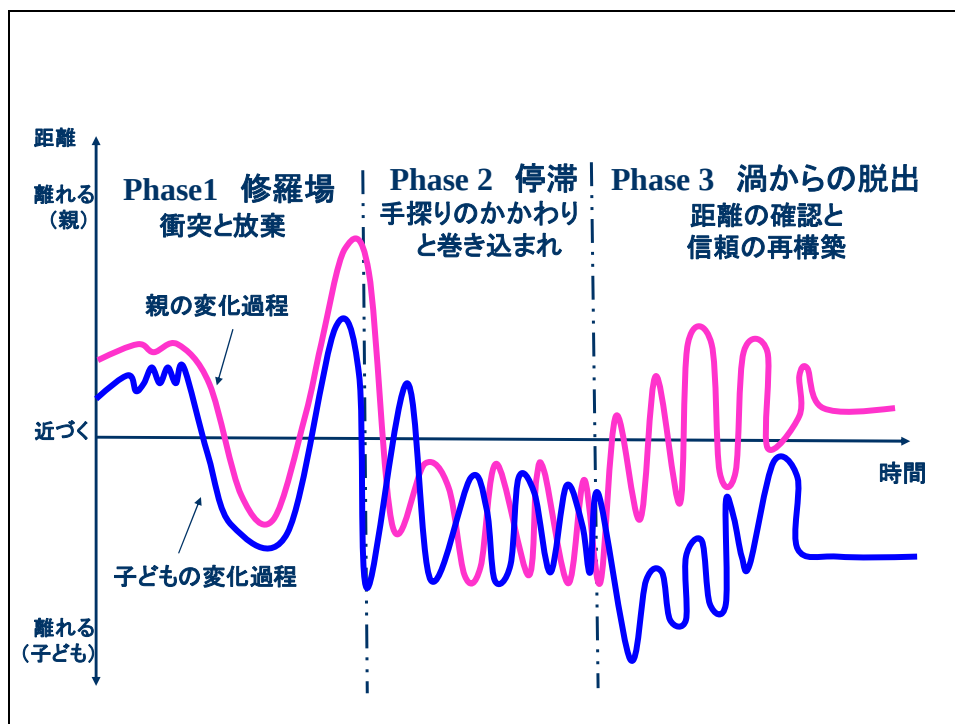


図 1. 「ともに揺れる」親子の相互作用と心理的距離 - 経時的変化-

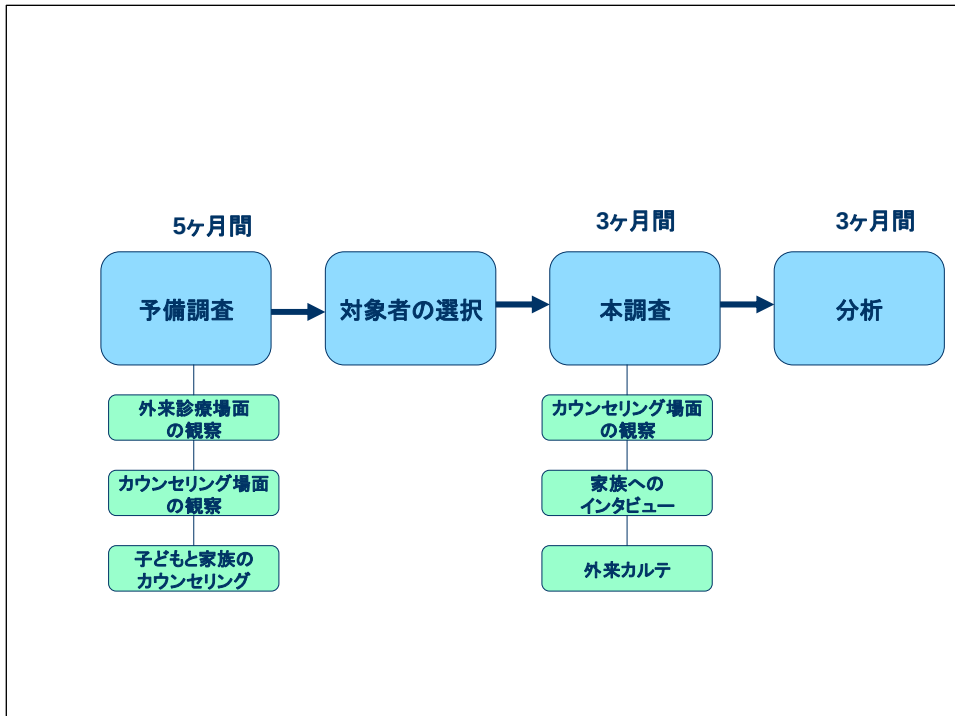


図 2. フィールドワークの経過

表 1. フィールドノート 1

対象者コード 009	日付：平成 X 年 5 月 X 日
・ 退院前に本人と両親そろっての初めてのカウンセリング場面。父親は紺色のスーツに白のポロシャツ，母親はふっくらとした感じで，栗色に髪を染めたショートカットの色白のお母さん。若草色のカーディガンと白のスカートで春らしい格好。母親が壁側，A 子ちゃんがカウンセラーの前に座り，お父さんは A 子ちゃんの横とカウンセラーの間に別のイスを持ってきて，テーブルを囲むように坐る。退院に向けて，退院後の注意をカウンセラーから話される。父親はどうやって家で対処していけばいいのか不安な様子で話される。 ・ F:A 子が混乱してパニックになった時は，僕らもどうしてそうなるのか解らなかった。何か気になるからそうなるんだろうけど，それが何か解らんです。 ・ C:ぎゃあーぎゃあー言うのを何で止めさせないといかんのですか？（中略） ・ 面接終了後，A 子ちゃんがカメラでカウンセラーと写真をとりたいといい，「A 子ちゃんの 1 ページね」と言いながら，私とも一緒に写真を撮ってくれる。入院当初の消え入るような声とは違い，張りのある勢いのある声で自信がある様子。両親の前では少し緊張したおもむきだが，しっかりした，意思の強いところが伺える。	

表 2. フィールドノート 2

対象者コード 005	日付：平成 X 年 5 月 X 日
・ 血友病の弟と 3 人で来院。カウンセリング室のドアを開けるなり，B ちゃんが「先生！」といって駆け込んでくる。血友病の弟(5 歳)はベビーカーに乗っているが即座に箱庭療法の箱の砂に触りたがろうとし，棚にある人形などを砂の上におこうとする。 ・ B ちゃんが，弟のベビーカーを箱の近くに寄せてあげようとするが，話の途中で親の気を引こうと手や足をばたつかせる。口蓋裂があるため，弟の話す言葉は聞きとりにくい，B ちゃんは理解でき，弟に話しかける。B ちゃんは部屋の中をぐるぐると回って，椅子には座ろうとしない。（中略）自分の興味のある人形や置物を触っていたが，箱庭で弟と遊ぼうとする。次第に「トランプをしようよ」とカウンセラーとお母さんの方に近寄り，トランプを一緒にしてと求める。 ・ 母親は眼鏡をかけ少し色黒でほっそりしたお母さん。ショートカットでニコニコと笑いながらしゃべるが，どこことなく憂鬱な雰囲気が見られる。子どもが母親に対して話しかけると，「うんうん」といって頷いたり，ままごとセットでご飯を用意してくれると，「むしゃくしゃ」といって食べる振りをし，子どもの遊びに付き合う様子は見られる。	

表 3. フィールドノート 3.

フィールドノート インタビューの振り返り	対象者コード：007 日付：X 年 6 月 2 日
・ 本日はじめてのインタビューを行った。最初挨拶だけのつもりが、インタビューして下さいといった設定になってしまった。(中略) ・ お母さんが話して下さいかなという不安とは裏腹に、母親は非常にうまくまとめて話をしてくださった。経過が長いこともあり、これまでの振り返りを喜んでくださった。帰りの列車の都合があり、たった 30 分のインタビューではあったが、実りあるものであったと思う。しかし、もっと細かな状況や場面を聞いていくほうが、もっとうまく条件や環境といった背景が出てくるのではないだろうか。 ・ 子どもと一緒にインタビューは、子どもの機嫌をいかにとるか、また、母親自身が子どもを心配する場面も何度か見られ、子どもとの相互作用は見られるが、母親が話しに集中できないといった欠点もあり、この問題をいかにクリアするかがインタビューの内容を濃いものにするであろう。	

表 4. フィールドノート 4.

フィールドノート インタビューの振り返り	対象者コード：004 日付：X 年 6 月 6 日
・ (中略) インタビューでは、Y さん自身がこれまでの振り返りをしっかり行いながら話しているといった印象を受け、ゆっくりとした会話のスピードもあったせいか、Y さんとのインタビューは比較的ゆったりとしたときの流れの中で、じっくり話を聞くことができた。 ・ こちらがあまり質問をすることをしなくても、話の中に自分が興味のあることの答えを見つけ出すことの重要性を感じた。質問項目の答えを、パズルを合わせるようにつなぎ合わせていくことが大切であると実感した日でもあった。 ・ 質問内容は大まかに 3 つ 4 つで十分であり、話している内容から即座に自分の興味へと持っていく技術は、いかに相手の話をじっくり理解し、いかに自分の興味と照らし合わせるかである。	

表 5. フィールドノート 5.

フィールドノート インタビューの振り返り	対象者コード：006 日付：X年6月14日
・ これまでのインタビューと比べると、自分の中で一番落ち着いて望めたインタビューではなかったであろうか。状況をあまり知らないこともあり、話に興味を持て、自分自身が楽しく聞けたと思う。 ・ Sさんは、状況を詳しく説明してくれるとともに、自分の素直な感情を述べられ、母親としての意識の変化が良く伝わってきた。途中2回ほど、過去のつらさを思い出し泣かれる場面があったが、本人が話したい気分になるまで何も言わずに待つこととした。すると、自力で話の流れをもとに戻して下さった。話をじっくり聞く、理解するのに集中力はかなり必要であり、疲れない聞き方も大切である。途中で、Sさんに電話が入る場面もあったが、中断した場合、どうやって前の場面に戻るかも大切である。 ・ インタビューが終わったあとで、Sさんは「私もたんたんとここまで話せるようになったんですね」というコメントを聞いたときには、インタビューをすることで、その人の経験の振り返りができ、本人自身の成長を確認できるといった利点がインタビューにはあるのではないだろうか。	

表 6. フィールドノート 6.

フィールドノート インタビューの振り返り	対象者コード：012、014 日付：X年7月26日
・ これまでのインタビューでは、自分の立場が「研究者あるいはカウンセラーなのか」あやふやなような感じがして、今ひとつ自信が持てなかった。 ・ しかし、TさんとOさんのインタビューを終えて感じた事は、自分が研究者として関与することで、家族の人のこれまでの努力を振り返り、家族が変化を感じる事ができるきっかけ「場」になりうることを実感できた。インタビュー中にインタビューの話の要約することや、変化がわかる質問をなげかけてあげることで、家族は自分達の変化に気づく、それが「治療的な会話でありケア」であることが感じられた。 ・ 家族の変化が大きい人、あるいは明らかに変化した家族はどのようなところが違うのであろうか？NさんとOさんのインタビューを比べて気づいた事は、Oさんは母親の変化、子どもの変化、家族の変化に明らかに納得し気づいていく事ができる。反対に、Nさんは大きな変化があったにも関わらず、その変化をまだ素直に受け止められない事が大きな違いである。子どもの変化に気づく感受性、家族の変化に気づく感受性が随分と関係しているのではあろうか？	

表 7. フィールドノートから分析した研究者の変化

フィールドノート	研究者の変化
6/2「話している内容から即座に自分の興味へと持っていく技術は、いかに相手の話をじっくり理解し、いかに自分の興味と照らし合わせるか...」	自分が欲しいデータを得るためのインタビューの技術向上に対する考え (インタビュー技術)
6/4「過去のつらさを思い出し泣かれる場面があったが、本人が話したい気分になるまで何も言わずに待つこととした。」	対象者に波長を合わせる態度 (インタビュー技術)
6/14 「Sさんから『私もたんとんとこまで話せるようになったんですね』というコメントを聞いたときには、インタビューをすることで、その人の経験の振り返りができ、本人自身の成長が確認できる...」	対象者の成長を発見できる力 (対象者を見る、感じる力)
7/26「家族の変化が大きい人、あるいは明らかに変化した家族はどのようなところが違うのであろうか？（中略）子どもの変化に気づく感受性、家族の変化に気づく感受性が随分と関係しているのであろうか？」	対象者の行動の影響要因を考えそれを記述する力 (データを記述、比較、分析する力)